

# ボルノーにおけるフレーベル幼児教育思想の一考察（２）

－ 「恩物」の教育学的意義について －

広 岡 義 之

A Study of the F.W.A.Fröbel's Infant Educational Thought  
by O.F.Bollnow (2)

－ The educational meaning of Fröbel's 'Gabe' (Gift) －

Yoshiyuki HIROOKA

## 要 旨

本稿では、実際にフレーベルの考案した遊戯「恩物」について、具体的に考察を深めていく。その際には主としてボルノーの教育学的視点から、フレーベルの「恩物」等の働きや教育学的意義について論究されていくだろう。

In this paper, we try to consider Fröbel's "Gaben" concretely. This paper treats of Fröbel's "Gaben" from point of O.F.Bollnow's educational thought.

キーワード：フレーベル、「恩物（Gaben）」、「カイルハウ小冊子」、ボルノー、幼稚園、「遊戯（Spiel）」、万有在神論、ロマン主義

## 第１章 フレーベルの「恩物」考案 と「幼稚園」設立の必然性 －序に代えて－

本稿は、「ボルノーにおけるフレーベル幼児教育思想の一考察」（⑦155～166頁）の続編として位置づけられる。前編ではフレーベルの幼児教育思想全般を理論的に解説したので、本稿では、その流れを受け継ぎ、実際にフレーベルの考案した遊戯「恩物」を中心に、具体的・実践的に考察を深めていきたい。つまりフレーベル（Friedrich

Wilhelm August Frobel, 1782～1852）が「恩物」という遊具をどのように教育（学）的に把握していたのかという点に集中して考察していく。その際、前編同様に主としてボルノーの視点から、フレーベルの「恩物」等について論究されていく。

### ●「子どもという時間」は人生という時間の流れ において特権的な時間である

矢野智司によれば、フレーベルはロマン主義の思想に影響され、「子どもという時間」を人生という時間の流れにおいて、特権的な時間だと理解していた。さらにフレーベルはこの世界のすべて

のものに神的な生命の法則が宿っていると捉えていた。たとえば、結晶が生まれる過程、植物が成長する過程、子どもが大人になる精神の過程のすべてに同一の原理が働いていると考え、これを「神的法則」とフレーベルは捉えていた。矢野智司によれば、フレーベルは当時の現代思想であるフィヒテやシェリングの哲学思想に強く刺激され、きわめてユニークなシステム理論を構築していたことになる。（①105頁参照）

●人間はいかにして生命に溢れた意味の世界を、  
創造的に生きることができるのか

矢野智司は言う。「そこでめざされていたのは、人間はどのようにすれば、生命に溢れた意味の世界を、創造的に生きることができるのかということであった。」（①105頁）

フレーベルにとって子どもという時間は、独自の意味が与えられている。「子どもは宇宙をつらぬく生命の法則の現れとしてとらえられ、子どもに内在しているこの生命的な法則を実現することを、教育の目的とした。（中略）それは、特別に工夫された遊びや道具によって、世界や自然や他者とのあいだの境界が解けてしまうような溶解体験を、子どもたちにもたらすことであった。」（①105頁）

●フレーベルは幼稚園を溶解体験の場として、遊びの空間として理解した

翻って、私たち大人もまた音楽に聴き入っているときや海の波をみている間にリズムに同調して、我を忘れてしまう体験をすることがあるが、これこそが「溶解体験」なのである。そこで矢野智司は言う。「溶解体験は、日常の目的-手段関係によるルーティンと化してしまった世界の区切り方をかえて、世界や他者とからだをとおして全面的に出会うことを可能にする。役割として部分的に限定された世界との関係を生きている人間には、生きた世界と出会う溶解体験が必要なのである。」（①106頁）

フレーベルが目指したことは、こうした子どもの体験を体系的・組織的に深め、生命的な充実を実現することであった。そのために結晶・植物・

精神のすべてを貫く形態形成の過程を「パターンの同一性から、メタファーとして結び合わせようとする」とらえ方がもとめられる。」（①106頁）

いずれにせよ、フレーベルは「子どもの園」（幼稚園）を溶解体験の場として、遊びの空間として理解したことは言うまでもない。そこでは、歌や手遊び、積み木遊びやダンスという溶解体験を深めるためにメタファーとリズムを駆使した遊びが工夫されたと矢野智司は鋭く指摘している。（①107頁参照）

●「見つかった！ 見つかった！ その名はキンダーガルテン」（フレーベル）

藤井恵美子および石川道夫によれば、フレーベルは1837年（56歳）に、ウィルヘルミネ夫人の提案で、中部ドイツのカイルハウ近郊の水車小屋を借りて、「自己教授と自己教育に導く直観教授のための教育所」を開設した。その後、フレーベルは教育用具（恩物）の開発に没頭し、その販売に合わせて教育所の名前を「幼少年の作業衝動を育むための教育所」と改称した。この教育所は実際には遊具を制作販売するための工房のようなものだったという。これが1839年にはパート・ブランケンブルクに「幼児教育指導者講習科」という名称を付けて、世界初の保育者養成機関として開設されることになる。ここで学ぶ講習生に、保育の実習をさせるために、近隣の6歳以下の幼児たちを集めて、保育体験をさせることになった。（⑥53頁参照）

この養成機関が、「世話、遊び、および作業の教育所」と名付けられ、1840年に改名されて「キンダーガルテン」として成立することになる。1840年の春の日、フレーベルがチューリンゲンの森をカイルハウからブランケンブルクに向かって帰る途中、山道から眼下に広がるブランケンブルクの自然があたかも「花園」のように見えたという。その光景のあまりの美しさにフレーベルが「見つかった！ 見つかった！ その名はキンダーガルテンでなくてはならない」と叫んだことはフレーベルの有名な逸話である。（⑥54頁参照）

### ●幼児教育への傾倒と「恩物」の制作普及

ところでボルノーにしたがえば、フレーベルの教育思想を考える場合、体系的秩序が深化するほど、基礎づけの段階、つまり早期幼児教育から始める必要が生じてくるという。そしてこの方向は、「内部への道」である根源への回帰を志向していたロマン主義と深く連関することとなる。具体的にフレーベルは、子どもの活動は細心に考案された遊戯道具によって正しく指導され、子どもたちは良い方向へ形成されると確信していた。これがフレーベルのいう「恩物」(Gaben)である。(②Vgl., S.175f. 133～134頁参照)

このように「恩物」は特別の指導を必要とし、大人の援助なしでは子どもはけっして遊ぶことはできなかった。この遊具を指導する母親や指導員を養成する必要がある、そこから「幼稚園」(Kindergarten=子どもの園)というものが必然的に誕生することになった。(②Vgl., S.176f. 136～137頁参照)

### ●フレーベルが特別の教育施設を設定する必然性

ここでボルノーはフレーベルの作為的ともいえる幼児教育方法の教育学の意義を問うている。フレーベルの考案した個々の遊戯(恩物)は、きわめて巧妙にしかも系統的に構成されているために、幼い子どもは自分自身で遊ぶことができない。その意味するところは、大人や教師が幼い子どもを指導することが求められるということであり、一種の「遊び方要領」が必要になってくる。しかしこうした特徴にこそ、フレーベルが特別の教育施設を設定する必然があったとも言えるのである。そして実際にそこから幼稚園教師のゼミナールが誕生したのである。(④235頁参照)

フレーベルにとって、基本的に個々のものから普遍的なものへ、また目に見えるものから隠れた、より深い法則を感じ取るようにすることが大切なのである。『人間の教育』の冒頭の文章が如実に示しているように、世界の象徴的な構造が前提となっている。(⑦160～161頁参照) すべての外的なものは精神的なものの表現であるとフレーベルは確信していたが、こうした教育思想は究極的に

は宗教教育の根本課題となるものである。(④235頁参照)

## 第2章 フレーベルの「恩物」の特徴と使用法

### ●恩物について

先述したとおり、「恩物」とはフレーベルによって創案され、体系づけられた、一連の教育遊具の総称である。元来、「恩物」とは「神が人間に与えたすばらしい賜物」という意味であり、ドイツ語で"Gabe", 英語で"Gift"と名付けられている。フレーベルは、宇宙の万物は神の理性によって創造され、合理的に分類されていると考えた。それゆえ生活する人間もまた一切の対象の影響を受けて生きているとフレーベルは確信していた。幼児もまたその中で生きているので、幼児が事物の本質を知るためには、神の創造した基本的な形を知らなければならない。その基本形を遊具として幼児に与え、そのものに内在する能力を幼児の能力とともに発展させることこそが、幼児教育の本質であるとフレーベルは主張したのである。(⑤6頁参照)

フレーベルの幼児教育思想の核心には、意味深い遊戯の理論が存在する。さらにその背後には子どもの本性が純粋無垢なままに育まれるような幼児に適した活動形式が存在する。フレーベルはその遊戯を「恩物」と呼称した。それは、幼児が本来保持しえる様々な能力を発達させるための遊戯の体系である。(④229頁参照)

フレーベルによれば、遊戯とは人間の諸力の自発的表現であり、こうした遊戯は子どもによって適切に選択された自己活動と自発性の対象が与えられることによって初めて遊具となる。こうした一連の遊戯道具を使用することによって子どもは自らの周囲の世界の把握が可能となる。(②Vgl., S.189. 154～155頁参照)

フレーベルは自身の遊戯の体系を第三者に誤解されないように、その関係性に番号を付して第一恩物、第二恩物、第三恩物というように強調した。以下では具体的に恩物の特徴とその教育的意味に

ついて考察を展開していきたい。

### ●第一恩物

「第一恩物」は、子どもの手に合うような大きさの毛糸でできた、一定の色彩の施された球（ボール）が重要な役割を果たす。たとえばそれは一本のひもでつるされ、振り子のように左右に振れるように設定される。フレーベルはこの玩具に、深い象徴的意義を与えている。つまり、球形は完全性を象徴し、最も完全な形を表現している。子どもは、糸で吊り下げられている球（ボール）を手で掴み放す。さらに揺れた球（ボール）を掴んで放すという動作を繰り返すことで、人生の真理としての別離と再会を予感するとフレーベルは考えたのである。この遊戯を通して、幼児は人間の生一般の根本問題を経験できるという。子どもは球（ボール）と遊ぶことによって、先述の合一と離別、再合一という弁証法的過程を純粋な形で体験していくが、フレーベルはそのことを「基礎的生活形式」と呼称した。（④229頁参照）



第一恩物：吊るした状態（筆者撮影）

フレーベルによれば、球（ボール）自体が幼児期の子どものみならず少年期の子どもにとっても持続的な魅力を持っているという。特に幼児期の最初は、球（ボール）は深遠な象徴的意味に満ちているとフレーベルは確信していた。ボルノーは、語源的には十分に承認できない説ではあるが、と前置きしつつも以下のフレーベルの独自性を鋭く指摘している。すなわちフレーベルが、「ボール」"B-all" を、「万物の像」"Bild vom All" と理解している点は興味深い。（②Vgl., S.190. 155～156頁参照）

球（ボール）は完全に丸く自己完結しており、自己自身とすべての対象の一般的な模像となる。ボールはまた想像力の活動の要求に应答する。たとえば、ボールは鳥、犬、リス等の象徴的な代表となる。それゆえ、幼児がボールを手にとってそれを指で掴み、そして正しく取り扱うことによって遊戯（恩物）を使用していくのである。この場合には球（ボール）は吊るされることなく、単独で幼児のもとにあって使用されることになる。フレーベルによれば、こうした遊戯を通して、子どもたちは人間の生涯、幼年期における事柄の正しい取り扱いを無意識に準備していくという。（②Vgl., S.190f. 156～157頁参照）



第一恩物：ばらばらの状態（筆者撮影）

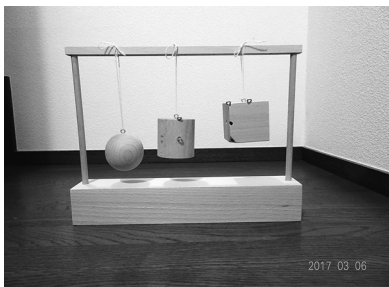
いずれにせよ、球（ボール）との単純な遊戯を通して、幼児あるいは乳児としての人間が、自らの生き方および万物の生の真中へ移し置かれるのである。（②Vgl., S.193. 160頁参照）

### <第一恩物での遊び方>

- 1 球（ボール）を、蝶々（ちょうちょ）や小鳥のように動かして、歌いながら手のひらに止まらせる。
- 2 みんなで歌いながら、手から手へ送って渡していく。
- 3 保育者や子どもがお店屋さんになり、子どもが買う人になる。
- 4 球（ボール）を渡す場合は、自然に遊びに入っていけるようにし、片付ける場合も同様に、遊びの延長で片付けられるように工夫する。（⑤16頁参照）

## ●第二恩物

「第二恩物」は、子どもの手で持つことができる球（ボール）と円筒そして立方体（すべて木製）から構成される遊戯である。ここで本質的なことは球（ボール）と立方体の対比関係である。球（ボール）はどちらの方向にも転がるが、立方体は簡単には動かないし、せいぜいのところ傾けてひっくり返すことしかできない。この対比はロマン主義独特の思想であり、世界全体を支配する両極性の表現と解釈される。（④230頁参照）



第二恩物：球（ボール）と円筒そして立方体（筆者撮影）

立方体は男性的なものの象徴であり、球（ボール）は女性的なものの象徴であり、これはフレーベルの主著の一つ『母の歌と愛の歌』の扉で取り上げられている。さらに立方体を土台として、円柱を柱身とし、球（ボール）を冠・柱頭として、この三要素を統合してフレーベルの墓が作られている。（④230頁参照）



フレーベルの墓：（広島大学大学院教授 鈴木由美子先生撮影）

＜第二恩物の球（ボール）と円柱を使った遊び方＞

- 1 球（ボール）は、たえずおとなしくじっとしていません。
- 2 円柱はお行儀よく座しているときもあるし、ころがるときもあります。
- 3 球（ボール）と円柱はどちらが速いか転がしてみよう。（⑤32頁参照）

＜第二恩物の立方体を使った遊び方＞

- 1 立方体の一つずつ持ってきてください。
- 2 好きな模様の紙を箱の面に貼りましょう。（「面」を幼児に意識させる）
- 3 ふちのところは赤く塗ってください。（「ふち」や「角」を幼児に意識させる）
- 4 角はいくつあるでしょう。1, 2, 3, … 7, 8。（⑤33頁参照）

「第二恩物」は元来、球（ボール）と立方体で成立していたが、さらに円柱と円錐が追加され、最終的に球（ボール）、立方体、円柱の三幅対で構成されることとなった。フレーベルはここでこの三つの建築学的関連性の可能性を指摘している。たとえば、フレーベル亡き後に、球が円柱の上に据えられ、円柱が立方体の上に置かれた形態のフレーベルの墓石が、カイルハウ時代の弟子によって制作されている。（Vgl., S.193. 160頁参照）

「球」は全面的に丸く流動的であるが、「立方体」は固定したもので軸と平面によって制限されている。この両者の間に位置するのが「円柱」である。幼児は球がただ一点で底面と接して、少し触るだけで動き出すことを経験している。それに対して立方体は、その面が底面に定着しており、動かしにくく、力を入れて押して動かすが、稜線に沿ってひっくり返して動かすしかない。（Vgl., S.193f. 161頁参照）

第二恩物のもう一つの立方体は次のようなものである。その立方体は、一つの稜角と一本の稜線の中央点と一つの面の中心点にそれぞれ糸を通す小さな金属環を持っている。それに糸を通して吊り下げて回転させることができる。幼児たちはこうして生ずる回転形を楽しむことが可能となる。（Vgl., S.194. 161～162頁参照）

＜第二恩物の回転あそび＞

回転させると見えるものを提示してその不思議を体験させる。

- 1 円柱の平面中央にひもをつけ、それを回転させると円柱が見える。



- 2 しかしながら円柱の曲面中央にひもをつけ、それを回転させると球（ボール）が見える。
- 3 次に円柱のふちにひもをつけ、それを回転させると球（ボール）と紡錘体が見えるようになる。
- 4 立方体の平面中央にひもをつけ、それを回転させると円柱が見える。
- 5 次に立方体のふちにひもをつけ、それを回転させると球（ボール）と紡錘体が見えるようになる。
- 6 さらに立方体の角にひもをつけ、それを回転させるとやはり、球（ボール）と紡錘体が見えるようになる。（⑤38頁参照）

### ●第三恩物

「第三恩物」はフレーベルの言を借りれば、各方面が一回分割された立方体で、八個の部分立方体に分割されている。参考までに示しておく、第二恩物の立方体の各辺は六センチメートルであったが、第三恩物では各辺三センチメートルと小さくなっている。立方体を分割することにより、分解と統合、部分と全体の関連性を子どもたちは学ぶことになる。「第一恩物」が最も一般的な生の範疇を示しており、「第二恩物」は空間的形象の差異性へと移行した。この「第三恩物」で初めて、遊戯の神秘性を規定する数学的法則性と美が展開されることになる。フレーベル研究の第一人者であるエリカ・ホフマンによれば、これは「全体系への鍵」と言われるほどの充実した内容のものである。一般にフレーベルは恩物に三つの可能性を見出している。「生・事象・使用の形式」、「美・響き・造形の形式」、「認識・思考・学習の形式」の三つである。フレーベルにしたがえば、この第三恩物において子どもたちは、「生の形式」から出発し、「美の形式」を経て、「認識の形式」へと到達するという。この点についてさらに具体的に考察していこう。（②S.194f. 162頁参照）

<第三恩物のお話を作りながら立方体を組み立てていくあそび>

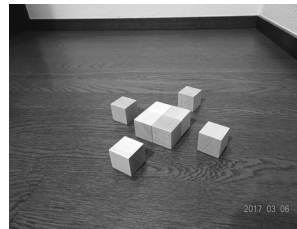
第一の「生の形式」では、幼児が積み木で八個

の部分立方体を使って実生活の対象物である壁、校舎、ベンチ、橋等を作っていく。フレーベルにとって重要なことは、箱の中に収納されていた未分化の立方体が、机の上でその都度関係し合っ

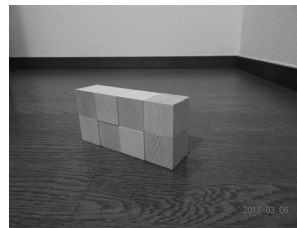
て様々な形に変形していく不思議さである。（②Vgl., S.195. 163頁参照）

- 1 子ども自らがお話を作りながら組み立てていく。
- 2 友達や親や保育者と一緒にお話をつくり、それぞれのイメージで組み立てていく。

具体例：生活の形式

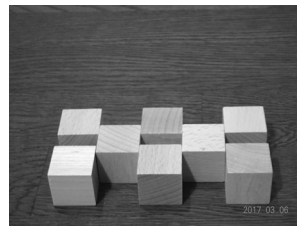


第三恩物を使った遊び：  
「そろそろお昼ですね。  
お弁当を食べましょう。  
いすとテーブルもありますよ。」（筆者撮影）

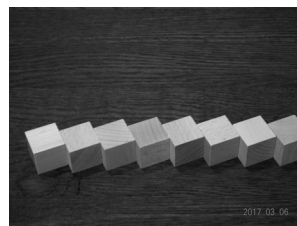


第三恩物を使った遊び：  
「そろそろ帰りましょ  
う。帰りは2階建バス  
に乗りましょう。」（筆  
者撮影）

第二の「美の形式」では、横模様で幼児たちは恩物を楽しむことができる。ここでは二つの事例を紹介してみたい。



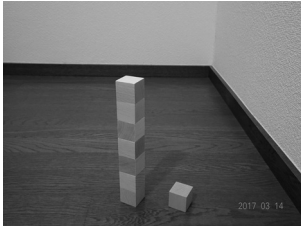
第三恩物を使った遊び：  
左右対称の形（筆者撮  
影）



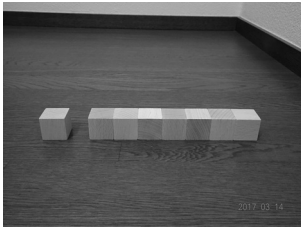
第三恩物を使った遊び：  
リズムがあるもの（筆  
者撮影）

（⑤46頁参照）

第三の「認識の形式」では数学的連関を説明することが求められる。幼児は四つの立方体を積み上げてできた柱が、残りの四つの立方体を集めてできた正方形と等しいことを体験することを通して、数学的法則性を会得することになる。(②Vgl., S.196. 164頁参照)



第三恩物を使った高さの遊び：比べて遊ぶ、「どっちが高いかな」(筆者撮影)



第三恩物を使った長さの遊び：比べて遊ぶ、「どっちが長いかな」(筆者撮影)

(⑤49 頁参照)

＜第三恩物で、立方体を「踊らせて」(同時に移動させて) 模様を作る遊び＞

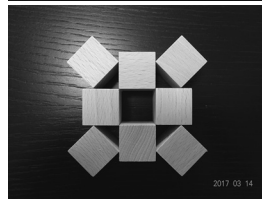
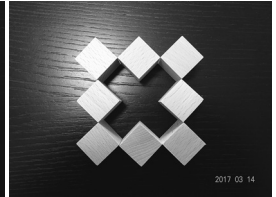
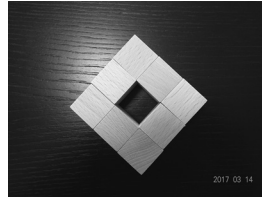
いずれにせよ、この第三恩物に至って初めてフレーベルの遊戯の精神を決定づける神秘的で数学的合法則性と美全体が提示されることになる。美的喜びとしての「美の形式」では、空間の直観力を集中させることを目的とする。フレーベルのいわゆる立方体を「踊らせる」ことによって、子どもたちは一心不乱に集中して、誰もが捉えられてしまうような不思議な魅力に取りつかれていくのである。(④230～231頁参照)

この立方体が「踊る」ということについて、重要なことは隠れた合法則性が、数学的形体の絶えざる変化に発展していくというなかに存在するという事実である。それはノヴァーリスが「神々の生は数学である」と述べたことと関連する。またフレーベルのこうした思想はロマン主義の思考全体に関連した、究極的存在として経験される世界数学なのである。そしてこのことをフレーベルは永遠の「天球の法則」と捉えたのである。(④232

頁参照)

さらに図形が閉じた塊から開いた花輪になり、また回転運動を経て、再び塊へと回帰する様は「敬虔な心情と精神の気分」で遊戯することによってのみ経験されるという。フレーベルにあっては神性そのものがこうした遊びにおいて輝いているという。こうした遊戯は最初から宗教教育の一端であり、真正の神の認識に対応するものでもあるという。(②Vgl., S.196f. 165～166頁参照)

このように、フレーベルの恩物を使用した遊戯の究極的な秘儀は、変化の中にも一定の深い数学的法則性が隠されている点にある。こうしたフレーベルの世界数学は、ノヴァーリスの「神々の生は数学である」と一致するだろう。恩物に秘められた基礎的数学も、「フレーベルの天才的な根本思想」(シュプラランガー)なのである。(②Vgl., S.197f. 166～167頁参照)



第三恩物：立方体を「踊らせて」模様を作る(筆者撮影)

(⑤48頁参照)

#### ●残りの恩物

ボルノーによれば、残りの恩物は第三恩物で示された図式を豊富な手段で反復するものである。それらは生と美と認識の形式にしたがって組み立てられている。第四恩物は「長方体」の「狭い側面あるいは広い側面を中心点のまわりに配置することによって生ずる放射状の包囲と円形の包囲との差異が重要となる」。(②S.198. 167頁) 残る恩物の紹介については紙幅の関係でこれ以上、提示することができないので今後の課題とする。

### 第３章 フレーベル幼児教育学の 今日的意義 ―結語に代えて―

ボルノーは、フレーベル的な幼児教育思想は次の点で今日の教育においても十分に有意義であると主張する。ここでは結論としてフレーベル幼児教育学に対する若干の批判とともに、以下の３点の今日的意義を指摘して終わることにする。

#### ●フレーベルに対する批判

フレーベルに対する批判としては以下の視点が代表的な意見である。すなわち、子どもは恩物のような複雑な思考過程を理解できないのではないのかという点である。しかしフレーベルはきっぱりと反論して、子どもはそうした複雑な思考過程を理解する必要はないと主張する。理性的認識や概念的認識では理解できなくとも、ゆっくりと遊戯を経験する中で後になってから考えが明らかになるように、まずは予感し感得できればいいのだとフレーベルは確信していた。しかもこの「予感」の概念はフレーベルの教育学の中核を形成しているとボルノーは考える。フレーベルの主張する「予感」とは、象徴を象徴として把握する能力である。それは眼前にある個々のものから全体を感じることでできる能力であり、目に見えるものからその原因である普遍的、精神の世界を感じることでできる能力である。それは別言すれば、すべての意識的認識よりも先だって直観的形式で理解することでもある。（④235～236頁参照）

しかしながらフレーベルの教育思想の本質はロマン主義的、理想主義的世界観にあることはまちがいない。世界全体はフレーベルにとって調和のある意味深い、秩序だった関係であり、そこで人間（子どもを含む）は安全に信頼をもちつつ、住むことができるのである。しかし現代社会を生きる私たちは、こうした調和ある健全な秩序だった世界は崩壊していることを否応なく受け入れさせられている。世界は不気味で危機に脅かされている状態が長く続くことが明白になってきているために、フレーベル的な調和思想は子どもっぽい幻想であると批判されるのである。（④238頁参照）

#### ●庇護された「家」が子どもにとって必要不可欠な要素となる

フレーベル思想の今日的意義の第１は以下のとおりである。すなわち、私たちは現代社会で調和のある健全で秩序だった世界に生きていないにせよ、さらに現実の厳しい状況を知っているにせよ、子どもたちはさしあたり調和的世界の中で庇護されて育てられなければならない。このことは発達心理学的にもすでに実証済みのことである。例としてハーローの赤毛サルの実験、アタッチメント等を持ち出すまでもなく容易に理解できるだろう。いずれにせよ、子どもたちに調和のある完結した世界があることを体験させることによってのみ、子どもは健全に成長していくのである。そうした子どもは、仮に危険な状況に晒されたとしても、しっかりと耐えていけるのである。そのためには庇護された「家」が子どもにとって必要不可欠な要素となる。フレーベルの幼児教育はこの点を強調しているとボルノーは考えるのである。（④239頁参照）

#### ●子どもたちと遊ぶことによって大人もまた自分自身が若返る

第２に、たとえ子どもっぽい素朴な世界の意味がやむなく崩壊せざるを得ないにしても、そのことによって秩序ある世界という思想は無意味になってしまうのではないとボルノーは強調する。子どもっぽい素朴な秩序に代わって、差し迫っている混沌から新たな秩序を生み出すという人間的な課題が生じてくる。大人がこうした課題を成就するためにも彼は若いときに一度はこうした「秩序の経験」を味わっておかなければならない。こうした意味から、ボルノーは以下のことを確信している。すなわち、厳しく苦しい経験を経てきた大人が子どもたちと交わることによって、フレーベルの遊戯が内包する魅力に夢中になることが可能となる。フレーベルの遊戯の思想と実践は、たんに子どもが予感を育むのを助けるだけでなく、子どもたちと遊ぶことによって大人もまた自分自身が若返ることが可能となる。（⑦163～165頁参照）そしてこれこそがフレーベルの信念であった、



とボルノーは主張するのである。この信念は、フレーベルのいわゆる「子どもに生きようではないか！」(Lasst uns unsern Kindern leben!) (『人間の教育』)という言葉の意味するものと同じものである。フレーベルはこのスローガンによって、幼児の低い段階に大人を引き下ろすのではなく、老化し、多忙さによって失われた人間性を取り戻して若返るということを主張しているのである。それゆえ、教育とはただ子どもたちがはやく大人になること援助し、社会に適応させることではない。真の意味での教育とは、人間性が外的活動によって喪失しないように絶えず人間性全体を新たに精神的に生まれ変わる過程である。(④240頁参照)

### ●「予感・直観」(フレーベル)の徹底的な教育が幼児にとって必要不可欠

最後に現代における幼児教育の議論で、「読み方」の早期教育の可能性が話題となるが、その点についてボルノーは以下のように鋭く指摘している。たとえば4歳で「読み方」を覚えることができるということは証明されているのは事実である。しかし、幼い子どもが、看板や見出しをただ読むことにどれほどの意味があるのかとボルノーは疑問を呈している。「読み方」を覚えることによって総合的知能が高まると言われ、幼い子どもたちは活発な知能を発達させられると主張するかもしれない。しかしボルノーはそうした「読み方」の早期教育では、釣り合いのとれない偏りという問題が生じないかと疑問を呈しているのである。ボルノーに従えば、子どもの発達段階全体における「読み方」の早期教育よりも、むしろフレーベルのいう「予感・直観」、もしくは自分で習得する概念づくりの徹底的な教育のほうが幼児にとってむしろ必要なのではないかと反論する。特にフレーベルが遊戯である「恩物」によって主張した教育的論点のほうが幼児の健全な発達にとって有効ではないかとボルノーは指摘するのである。「読み方」の早期教育では、本当の理解力が育たない、平均的な思考力の伴わないみせかけの受身的な態度を子どもたちにもたらすのではないか

とボルノーは考える。こうした本質的で基本的な視点が欠落しているとボルノーは「読み方」の早期教育を鋭く批判したうえで、幼児教育全体は、フレーベルの思想と再度取り組むことに意義があると結論づけたのである。(④242頁参照)

## 註

本論文で引用・援用する文献の表記については、本文中に、( )で①②等で示すこととする。その際、原書については「S.」、訳書については「頁」で表記する。また本文中の〔 〕は筆者による補足説明である。

- ①矢野智司著、『意味が躍動する生とは何かー遊ぶ子ども人間学ー』、織書房、2006年。
- ② O.F.Bollnow, *Die Pädagogik der deutschen Romantik*; von Arndt bis Fröbel. Stuttgart, 1952, 1967, 2. Aufl.,  
ボルノー著、岡本英明訳、『フレーベルの教育学ードイツ・ロマン派教育の華ー』、理想社、1973年。
- ③武政太郎監修、有院校閣、玉成高等保育学校幼児保育研究会編、『フレーベルの恩物の理論とその実際』、フレーベル館、1977年。
- ④ボルノー著、浜田正秀他訳、『対話への教育ーボルノー講演集ー』、玉川大学出版部、1973年。
- ⑤玉成恩物研究会編著、『フレーベルの恩物であそぼう』、フレーベル館、2000年。
- ⑥藤井恵美子・石川道夫著、「フレーベル幼稚園における子どもたちのための園庭ーフレーベルの菜園計画の発掘とその検討ー」、兵庫大学短期大学部研究収録、No46, 2012年, 53~63頁所収。
- ⑦広岡義之著、「ボルノーにおけるフレーベル幼児教育思想の一考察」、神戸親和女子大学児童教育学研究、第36号、2017年、155~166頁所収。

## 謝辞：

なお拙論の写真資料として使用したフレーベルの「恩物」については、神戸親和女子大学発達教育学部長の戸江茂博教授からお借りして、使用法等をご指導いただきました。またフレーベルの墓の写真については広島大学大学院の鈴木由美子先生が自ら撮影されたお写真をお借りすることができました。兵庫大学の藤井恵美子先生からは、様々な面で本論文の資料に関してご助言をいただきました。それぞれの先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。